源氏物語と平家物語の比較

村田　昇

平家物語という名は源氏物語に対照してつけたと考えられる。平家物語を王朝憧憬の思想が貫いている。五十嵐力は、平家物語は源氏物語の子であるといった。(戦記物語の研究) 源氏物語において、しみじみと豊かに育ったあはれな抒情の心法が、平曲の琵琶の響に伝奏されている。平家物語は王朝美の残照である。平家物語を書かせ平曲を謡わせた動力因は、源氏物語と同じ大慈悲である。源氏物語は文芸的佛経法華経・観経の心で書かんとする気魄があると考えられる。源氏物語は、天皇と更衣の悲恋から起筆されたが、平家物語(流布本)も源平盛衰記も涅槃経聖行品の四句偈と釈迦伝に因んで祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れるもの久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬひとへに風の前の塵に同じ。

と、仏教哲学を以って悲しくあはれに語り出されている。この哲学が全巻を貫流しているから、平家物語は仏教哲学詩である。これは紫式部の師と考えられる源信僧都の往生要集

或復仁王経有二四非常偈一可レ見、若楽二極楽一者如二金剛経一云一、一切有為法、如二夢幻泡影一、如レ露亦如レ電、応レ作二如レ是一、或復大経偈云、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為レ楽已上、祇園寺無常堂四角有二頗梨鐘一、鐘音中亦説二此偈一、病僧聞レ音苦悩即除得二清源楽一、如レ入二三禅一乗二生浄土一。

とあるによったものである。大経即ち大涅槃聖行品四句偈の前生譚は、法隆寺蔵推古天皇内持佛玉虫厨子の扉に画かれた施身聞偈の絵がある。これを文章にしたものは、源為憲が尊子内親王に献上した三宝絵詞(往生要集と翌年の花山天皇永観二年成、翌年保胤の日本往生極楽記成・紫式部は当時十歳の少女)がある。餓鬼に施身して半偈を聞いた雪山童子の壮烈無比な求道物語は、蘇我氏の悪逆を越えて、大無量寿国新日本を創建せんとする聖徳太子の誓願の象徴であった。この物語は説教師も説き、貴族の家庭でも子供に聞かせたことであろう。とにかく一般に流布し日本のアルファベットである七五四句の和讃いろはうたは、作者が判定されないが、涅槃経の四句偈を詠んで子女の手習の教材にしたものである。仏教の聖句を巧妙にアルファベットにしたことと、弘法大師空海が、極めて庶民教化に努力したことから、これを弘法の作として伝承されてきた。民衆詩平家物語の冒頭に謡はれたことと協調して、後世の思想、文

芸に大影響を与えている。**源氏物語**總角の巻に、

恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にやあとを消なまし

半なる偈教へけむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ、とおぼすそ

心きたなき聖心なりける

とある。この歌は、薫が亡き大君を恋ふ嘆きの歌である。これでみると、菩提心が愛欲否定の威力を揮い得ず、却って愛欲の助力をしている。勿論誇張した虚構とも考えられるが、こうした虚構を寛大に受入れる唯美的社会と、それを助長した天台、真言宗の人間性に対する寛容性を認めねばならぬ。命を賭けて恋をするあはれが男の喜びとして仏教的に赦されている。ここでは尚仏教は生の享楽の為に用いられ、死は畏ろし厭うべきものとして、直面せず、遠く遙けき来迎佛の願船に乗ずる日を待っている。生死の巌頭に立っての宗教的決断に至り得ず、生と死の中有にながめ、たゆたふ夢の浮橋の如き心境を、**心きたなき聖心**といっている。

生死は一如、生は死の表象、死は生の根源、人間は死すべき実在である。生は假我、死は実我である。中世以前に遠ざかる程、生が主で死は従、仏教は生の享楽の為に用いられ、中世においては死が主で生は従、仏教は死の完貫の為に用いられた。その橋が宇治十帖。宇治十帖の象徴が結巻**夢の浮橋**の巻である。而して中世への完成の第一歩が平曲であり、これを象徴するものが、序曲の涅槃経の四句偈の響である。

補　源氏物語の光源氏のモデルの一に釈迦伝があるという論究が拙著「**日本古典の仏教的精神**」（昭和三十三年・一橋書房版）にのせてある。

無常の美学

宇宙生命の創造的進化の秩序を顕現する**もの**は美である。外なる自然飛花落葉も、人間の身心も無常である。故に美である。宇宙生命の秩序を教える仏教は美学である。その経典は文芸である。祇園精舎の鐘は、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽と響き、沙羅双樹の花の色は、盛者必衰の理を現すが故に美である。これを最初に謡う平曲は、無常観念詩である。私は詩とは直観した宇宙生命秩序を**ことば**を縁として、十分に響流している**もの**と思考している。生も病も老も死も、種も熟も脱も、生も住も異も滅も、すべて宇宙の秩序である。無常である。美である。かく道得された処が、涅槃寂滅である。

人間が有機的社会生活を営むということは、有常と無尽縁起することであるから、諸行の無常ははかなく、かなしく、あはれである。美は無常なるが故に、命短き瞬間性、崩落性、脱弱性である。同一の主観の同一の体験が同一の美的対象に対して確実に繰り返されることはない。故に美を観ずる態度は、静閑・冒険・緊張・尖鋭・敏感でなければならぬ。空海が「文鏡秘府論」に三昧を言い、俊成・定家が摩訶止観を行じ、心敬が「ささめごと」に閑心を主張し、芭蕉が、

師のいはく乾坤の変は風雅のたね也といへり。静なるものは不変の姿也。動けるものは変也。時としてとめざれば、とどまらず。止むるといふは見とめ聞とむる也。飛花落葉の散乱するも、その中にして見とめ聞きとめざれば、をさまることなし。その活たる

ものだに消えて跡なし。又、句作りに師の詞有。物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし（土芳・三冊子）

美は永遠に瞬間的、只一度の新しき命の芽である。美に覚め信じた覚芽・信芽といってもよい。これをうけとめことばに形象したものが詩である。故に空海は、「文鏡秘府論」に

凡そ詩人は夜聞床頭に明かに一盞燈を置く。若し睡来らば睡に任せよ。睡覚めて即ち起く。興発って意生ず。精神清爽にして了々明白也。皆須く身を意中に在くべし。若し詩中に身無くば、即ち詩何に従ってか有らん。……紙筆墨常に須く身に随うべし。興来りて即ち録す。若し筆紙無ければ、旅の問に意多く草々たり。

という所以である。

一音・一句

宇宙の根元的無限生命美の大覚者である仏は、これを人間に開示することばを以ってする。仏教を一音教といい、仏は仏吼を以て吼す。衆の言音に入りて一切を開示す。慈辯を演べる（大経）にいう所以である。而して詩人は、宇宙の根元的生命美を全生活を以て追い求め、これをことばによって言いとめ且開示する。根元的生命の無限と、人間生命の無常との「億却相別而須臾不離盡日相対而刹那不対」（大燈国師）の如き無明的刹那的響合のあはれを、ことばによって結び、無常を転じて普遍・永遠とするものが詩人である。深い孤立的、主観、閉鎖的な自己を発見し、これを十分開顕に転るものはことばである。詩である。詩人である。ことばは永遠を現在とし、普遍を象徴とする。かくて生活も歴史も詩である。詩でなければならぬ。ことばを発見することは、普遍・永遠の生命に帰一することであるから、その為に有限有漏の人身を捨てて悔いはない。人身は無量寿・無量光の普遍永遠生命を獲得する為に生存する。涅槃経聖行品には、雪山童子が半偈の佛吼を聞く可く、羅刹に身を施し、この因縁を以って、十二劫の生死の罪を越えた本生譚が説かれてある。

補注　この譚は「三宝繪詞」に美しく訳されてある。法隆寺蔵国宝玉蟲厨子の扉には、これが画かれてある。半偈とは「生滅々已寂滅為楽」である。これは後半偈で前半偈は、「諸行無常、是生滅法」が前半偈である。平曲の冒頭に之を謡っている。今様に謡ったのが「いろはうた」である。作者は空海と伝えられているが疑問である。

法然は「往生極楽のためには、南無阿弥陀佛と申して、疑無く往生するぞと」信じた。そして

上人生年九歳より四十三に至るまで三十五年の学問、これ偏に出離の道にわづらひ、順次解説の要路をしらん為なり。是に依って遍諸業を学し給に師匠かへりて弟子となりぬ。有時上人、予に語ての給はく、法相三論天台華厳真言仏心の諸大乗の宗、遍学し悉明るに入門は異なりといへども、皆仏性の一理を悟顕ことを明す、所詮は一致なり。法は深妙なりといへども、我機すべて及難し。経典を披見するに其智最愚なり。行法を修習するに其心翻て昧し。朝朝に定めて悪趣に沈んことを恐怖す。夕夕に出離の縁に闕たることを悲歎す、忙忙たる恨には渡に船を失がごとし。朦朦たる憂には闇に道に迷がごとし。歎ながら如来の教法を習悲な

がら人師の解釈を学、黒谷の報恩蔵に入て、一切経を披見すること既に五遍に及ぬ。然れども猶いまだ出離の要法を悟得ず。愁情彌深、学意増盛なり。爰に善因急に熟し宿縁頓に顕れ、京師善導和尚勧化の八帖の聖書（上人在世船舟讃末二流布一故云二八帖一）を拝見するに末代造悪の凡夫、出離生死の旨を軌定判し給へり。粗管見していまだ玄意を暁めずといへども随喜身に余り、身も為堅てとりわきて見こと三遍前後合て八遍なり。時に観経敬善義の、一心専念彌陀名号の文に至て善意の元意を得たり。歓喜の余に聞人なかりしかども予が如の下機の行法は、阿彌陀佛の法蔵因位の昔かねて定置るるをやと、高声に唱て感悦髓に徹り、落涙千行なりき。（黒谷源空上人伝（十六門記））

と苦心している。これは南無阿弥陀仏を発見した因位法蔵菩薩五劫思惟の忍受を証得しているのである。名号の証得には、至誠心、深心、廻向発願心の三心を要とすると**観経**に説かれてある。この三心は無常を観じ、死を畏れる処に発る。志の至らざることは、無常を思はざる故（正法眼蔵随聞記）である。

補注　法蔵菩薩が五劫思惟して南無阿弥陀仏の名号を発見したということは、浄土三部経を結合して結釈したものである。親鸞は、無常観を「生死」と表現し、名号を尊号と信奉し、名を称するに能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまふ。称名は即ち是れ最勝真妙の正業なり。正業則ち是れ念仏なり。念仏則ち是れ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏即ち是れ正念なり。（教行信証、行巻）

といった。

平家物語の佛教的世界観

平家物語が王朝美・源氏物語美憧憬である根拠になる宗教的世界観がある。平家物語は法然浄土教宣布の観念詩であるという様式をもつ。法然は源信の天台浄土教を視述している。源信浄土教は芸術的観相を重んじ、大慈悲心を説き、欣求浄土・来迎信仰を勧める美的仏教であり、これを模倣したのが源氏物語の美である。源信浄土教と法然浄土教を結合したものに、平家物語の作者並にこれを**琵琶**に奏じた盲僧がいる。つまりこの二者は、源信教と浄土教の二者を併せ体していたのである。それは法然の高弟西山派の開祖証空の門流であったであろう。その理由を次に解明する。大体源信の天台浄土教は、観相的・芸術的・美的であるから、引声念仏・来迎信仰・寺院建築を重んずる。これは法然時代においては貴族の精神生活に受けつがれていた。例えば後白河院・後鳥羽院・兼實・慈鎮・俊成・定家等所謂新古今集歌人群がそれである。ところでこれら聖道門を行じえない貧賤者・愚痴者・破戒者等の下層庶民が、法然の慈悲の対象であった。当時の乱世に最も苦悩して救済を待っている者は、方丈記が誌す如く下層庶民であったのに、政権を握る貴族は、明月記に定家が「紅旗征戎非吾事」と誌した様に、天台教から影響を受けた美的生活を追及していて、庶民の苦悩は眼中に無かった。法然はその庶民の為に専修念仏の易行道を宣布した。この純粋精神が送釈本願念仏宗で、源信の美的仏教を否定したものである。例えば法然はその臨終に際し、「弟子等佛の御手に五色の糸をつけすすむれば、これをとり給はず。上人の給はく、此如くのことは是つね

の儀式なり。我身にをひてはいまかならずしもといひて、つねにこれをとり給はず。」（四十八巻伝）と、来迎の形式を斥けている。然るに證空は貴族源親季の長男であったから、貴族階級に接近すること多く、自ら専修念仏を天台化する必要に迫られた。嘉禄三年の弾圧の時も、専修念仏者ではなく天台の一僧侶といって、処罰を免がれている。証空は既に法然在世中から寺院建立の計画をもち、やがて西山善峰の往生院を再興した。法然をも含めた専修念仏者の中で、寺院をもったのは、恐らく証空が最初であろう。天台に接近した彼の教義は、必然的に儀式の為の堂舎を必要としたのである。右の往生院では、六時礼讃と共に不断念仏が始められたが、これは明に叡山の常行三昧の念仏を嗣ぐものであった。山法師の間で、証空について、「師の法然房は諸行の頸を切り、弟子の善恵房は諸行を生捕りにする」との批評があった程、天台化していた。証空が、「当麻曼陀羅註記」十巻を著したことは、一代聖教を「観経」十六観に統摂せんとする彼の教義と無関係ではない。「観門広ければ弘願成ず」として、天台の行法、特に止観に通ずる十六観相の優位を認めたとき、証空の教義の重心は、往生極楽より観極楽へと移行していた。[1] この証空が慈鎮に近づいたことは、十二分に考えられる。而して

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古の誉ありけるが、楽府の御論議の番にめされて、七徳の舞をふたつ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきけるを、心うき事にして、学問をすてて、遁世したりけるを、慈鎮和尚、一芸あるものをば、下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へてかたらせけり。（徒然草第二二六段）

において、行長や生仏が法然門徒よりも証空門徒であったと考えることが妥当ではあるまいか。又は、法然門徒としても、より強く証空教の感化を受けた者の作と考えられる。行長は慈鎮の長兄實の家司行隆の子で、雅楽の達人である。生仏は後白河法皇の今様の師資賢の子資時で、今様を法皇に授かり、藤師長と共に今様の二大名手として法皇から讃えられた。盲いて二十八歳出家して叡山盲僧の一団妙音殿の盲僧となり、法名生佛。多芸多能、笛、箏、和琴、郢曲に長けた。平安朝からあった妙音殿は、慈鎮のいた青蓮院に付属されていた。慈鎮は声明の達人であった。「徒然草参考」に曰く。

行長入道、慈鎮和尚の扶持せし故にや、平家のフシも多くは台家の声明に似たる処あり、六道講式のハカセ及び叡山大会の時など、よみあぐる声明のフシ今の座頭の読るにより、移りてまがう所多しといへるさもあるべし。[2]

「平家物語」巻三、大臣流罪に、師長が琵琶の名人であった記事がある。信濃入道を扶持したという慈鎮和尚は、藤原忠通の子で、四度天台座主となり大僧正に進み、嘉禄元年九月二十五日七十九歳で寂したが、晩年浄土教に帰し、法然上人に交誼があり、親鸞の先師であった。そこで慈鎮和尚に扶持されていた行長が、浄土教を奉じたであろうと想像できる。

平曲と法然浄土教

法然は源信浄土教をどの様に継いでいるであろうか。まづ引声念

仏がある。日本の念仏受容の源流は、比叡山常行堂の芸能的引声念仏に発している。日本の念仏の芸能性の伝統の根元はここにある。天台第三座主となった慈覚大師円仁（七九四―八六四）が齎した常行堂引声念仏は、五台山に伝えられた法然流の五台念仏であって、歌讃詠唱する音楽的念仏であった。[3]これはその後円珍（八一四―八九一）浄蔵（八九一―九六四）慈慧（九一三―九八五）源信（九四二―一〇一七）覚超（九六〇―一〇三四）懐空（―一〇八八）寛誓（？）良忍（一〇七三―一一二二）に至って大成した。琵琶を以って奏でられた源信作「六道講式」の調譜をみると、

〽一切諸世間生者皆歸死。盛者有必衰。合會有別離無有法常者云々。〽東代山前後立煙。使是朝眠夕語之。北邙新旧三露。寧非遠間近見之人耶。現世安楽之時。有心者尚厭之。未法濁乱之今。

何依竪執之云々（日本歌謡集成巻四）

と、本文の肩に二重、中早メ等の小書が加えてある。この小書は「声明」の調譜であって、それを数えると、中音、乙、下音、二重、中早メ、三重、中音早メの七種がある。これらは悉く平家琵琶の調譜に襲用されている。[4]元享釈書には、「忍、声明に深し、一日唄策を披き墨譜を盡す。忽ち策中に光明を放つ。此れより世は忍の業を推す。その後も継ぐ者忍の感応に乏しく、忍音韻のみを受く。これによって大原の地梵唄の場と成る。方今天下の声明を言う者、皆忍に視す」と、声明史上の功績を讃えている。良忍の多くの門流中に家寛、叡空があった。家寛は後白河法皇に伝えた。御撰「梁塵秘抄」に声明の研究が多く伝えられている理由である。叡空は法然に伝えた。平安朝末期には念仏は雅楽を結合した。良忍と同時代の員源は、念仏を雅楽化した天台僧で、その作になる順次往生講式は、その**念仏和讃**の曲譜に、**想佛恋**、往生忍、万歳楽等の雅楽譜を用いて和讃を詠唱した。その楽器には**琵琶**・簫・笛等で伴奏している。その戒文には、

非レ啻ニ礼讃稱念ニ以ニ妓楽歌詠一……律呂調レ音暫静ニ散心於一境一来世絲竹翫レ曲遍施ニ供養於十万一声為ニ仏事一

とある。比叡山常行堂の引声念仏は、良忍によって、従来の声明から雅楽や今様を加えた庶民的念仏芸能に改曲された。芸能化とは、仏教音楽の堕落を意味している。法然は、この天台声明念仏の融通性・芸能性を極度に利用して貴賤を教化したので、「元享釈書」には、これを評して、

元暦文治の間、源空法師専念の宗を建つ。遣派末流あるいは曲調に資し、抑揚頓挫、流暢哀婉、人性に感じ心を喜ばす。士女楽んで聞き雑沓駢闐す。愚化の一端となすべし。然るに流俗益々甚しく、動もすれば伎戯を衒う。燕宴の末席に交はり盃觴の余瀝を受く、瞽史娼伎と膝を促え互に唱う。痛しい哉真仏の秘号、蕩として鄭衛の末韻となる。或は又鐃磬を撃ち、跳躍を打つ、婦女を別たず街巷に喧噪す。その弊言うに足らず」という。又、「野守鏡」下には、「専修念仏の曲流布して、男女是にこぞりしかば、人皆声明のききを遠くし侍りけるに、嫡々相承の妙曲をあらためしゆへなるべし。それによりしていまにいたるまで、専修念仏の曲さかりなれば、正道の仏事をおこなふ人まれなり」と評している。瞽史とあるは、平曲等を語る盲人である。「新猿楽記」に「琵琶法師之物語」とあって、**琵琶法師**は平曲を語る以前に平曲以外に引声念仏をもちった和讃・

講式・寺社の本縁譚・霊顕譚の曲を語っていたと考えられる。その曲節は南都北嶺の格式ある声明を守ったものでなく、各々我流で定まれる節拍子も無く、別音を発し、而もこの為に人心を感動させて信徒が増すので、旧仏教は亡国の音として憎み斥けたのである。高野辰之氏は、

治承養和の頃、天台宗の澄憲によりて、喝導即ち説経が興隆し、其の子の聖覚、聖覚の子隆承と、子々孫々が之を伝へ、寛元年中には定圓が出て益々此の業は栄えた、然るにその果は諂諛交生、変体百出とでもいふべく、身首を揺かし、音韻を婉にし、言は傷を貴び、理は哀讃を主とし、人心を感ぜしめんとして、自ら泣くに至って、詐欺俳優の技と化した。彼の諸講式の文も末流にあっては、恐らく哀蕩叫吟を旨として読誦したに相違ない。平曲を語ることは、実にこんな仏教音芸の堕落時代に起ったのである。（日本歌謡史三九八頁）

といった。琵琶盲僧は生活の資財無く、山河に漂泊する悲運の賤民であったから、精神的にも物質的にも寺社を頼んで寄食したので仏縁が深かった。即ち平曲の祖とされている生仏も、慈鎮和尚の寺に寄食した東国生れの乞食僧で、「日吉の社へ三七日参籠して祈誓有りしかば、平家の物語に節を付て偈すべしとの御告有り」（当道要集）、「熊野権現ノ示現ニヲツテ、語リイタセル六巻ノ本アリ、夢中タクセンノ本ト號ス云々（当道要抄）ともあって、「山門の事を殊にゆゆしく書いた」（徒然草）のである。佐藤春夫は、平曲は法然教を語る観念詩といひ、（「心」誌十四巻五号）斉藤清衛氏も「平家物語の作者は、浄土宗門の学僧の一人であったことに疑はない」といはれた。（中世文学二一四頁）福井康順（文学昭和三四年十二月号）、家永三郎（国文学、昭和二十六年十月号）も同意見である。然し実は長年月間に多数の僧が参加しているのであって、その故に生長したのである。その参加者中に安居院の澄憲、聖覚又はその門流のいたことは間違ない。その一実例として、安居院流唱導書の一つ宝菩提院本「言泉集」鐘楼語蔵帖によって、平家物語冒頭の「祇園精舎の鐘の声云々」の句は、無常観を強調するものという以外に鎮魂の意味も含まれていることがわかる。[5]そこで琵琶法師に証空に寄食する者あり、証空がこれに平家物語のある部分を書き与えたという仮説を立てると、平曲と法然教、法然教と源信浄土教、法然教と王朝美といふ無礙の縁が一層親密に結ばれる。「哀歓悲哀の音曲をなすさま、めずらしくたうとく」（四十八巻伝）ともある如く、念仏弘通に芸能的念仏の効果があったので、証空は積極的に平曲を語る琵琶法師を援助したと思う。長年月中改作潤色を加えられた原平家の作者は未知である。正確にその年代と作者を知ることは不可能であろう。その改作潤色者中に、高野山蓮華谷に諸国を勧進して集った高野聖等や、[6]信濃前司行長や葉室時長や行長の実兄で法然の弟子で衣鉢の相承者信空等多数の人が想像せられる。[7]

源氏物語と平家物語の女性比較論

源氏物語には多くの女性を、女人哀史・女人往生伝の風に描いている。平家物語も亦これをうけついでいる。

平曲流布本巻一「妓王が事」に、白拍子妓王・妓女・佛が出る。賤婦白拍子が太政大臣清盛に寵愛される物語である。源氏物語では

更衣桐壺が、天皇の寵妃となり、木陰の小草の如きはかない紫の上は、光源氏の正妻となり、辺鄙な国司の孫が、中宮と成った。何れも作者が浄土教の人間平等観を信じていたからである。万葉巻頭の歌は、雄略天皇が野の一女性との愛の歌である。人間の運命の歴史の扉は女性によって開かれている。源氏物語の作者は、近代的自覚に悩む女性を次の如く描いた。

女ばかり、身をもてなすさまも、所狭う、あはれなるべきものはなし。もののあはれ折をかしきことも、見知らぬさまにひき入り、沈みなどすれば、何につけてか、世にふる栄え〳〵しさも、常なき世のつれ〴〵をもなぐさむべきぞは、おほかた、物の心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほし立てけん親もいと口惜しかるべきものにあらずや。心にのみこめて、無言太子とか法師ばらの悲しき事にする昔のたとひのやうに、悪しき事、よき事を思ひ知りながら、埋まれなんも、いふかひなし。わが心ながらも、よき程にはいかでか保つべき。（夕霧）

そして紫の上を秋に死なせている。妓王の歌は、

萌えいづるも　枯るゝも同じ　野辺の草　いづれか秋に　あはでは つべき

は、平曲を一貫する生者必滅・盛者必衰の平等観の諦念を歌っている。要するに平家物語を象徴すれば、色とりどりに紅葉の凋落する秋である。ほろびに向かう美である。

佛もむかしは凡夫なり　われらも遂には佛なり　いづれも仏性具せる身を　隔つるのみこそ悲しけり

と謡った今様は、仏性平等観である。この様に権威を畏れず積極的・行動的・意志的な女性は、源氏物語には見られない。浄土教の流布による一般庶民の人間的自覚の一証である。妓王姉妹と母並に佛の四人は、経済的独立の資無く、男性のなぐさみものにされ、権門に乞食する弱者であるが、源氏物語の女性も亦然りであった。尼になった妓王達四人は「一処に籠りゐて、朝夕仏前に向ひ、花香を供へて、他念なく願ひけるが、遅速こそありけれ、皆往生の素懐を遂げて」いる。往生の素懐を遂げたと書いたこのことは、汝人生の勝利者也という死者に対する最大の讃歌であって、平曲を一貫する崇高な理想である。無量寿に涅槃する四人の女性に比すれば、驕る者は久しからず、その故に「あっち死にし、日頃作り置かれし罪業ばかりこそ、獄卒となって迎に来た」清盛は、人生の敗北者であるとあはれんでいる。このあはれは大慈悲のあはれである。平曲はこのあはれの人間観照から語られている。四人の尼の死後は「後白河の法皇の、長講堂の過去帳にも、妓王・妓女・佛・刀自等が尊霊と、四人一所に入れられたり。ありがたかりし事ども なり」と、礼讃されたのみで、誰も愛着の涙を流したと書いていない。然るに桐壺更衣の死には、桐壺帝が慟哭している。源氏物語は一人の人間が、欲望的実存から芸術的実存へ、更に実教的実存へと次第に生長の歴程を描いた大河小説である。その男性の象徴が光源氏、女性の象徴が紫の上である。紫の上は世をはかなみ度々出家の希望を訴えるが、光源氏はこれを許さない。これは当時の貴族の出家は、勇猛な菩薩心に由るものでなく、栄耀栄華の果であり、この世におもうことなき姿の現れ、仏教的美的生活であったことを憂いたからである。これは当時の出家に対する作者の批判でもある。紫の上が死んだので

はじめて夕霧に落飾を命じた。然し夕霧は「観無量寿経」の「一日一夜持二八戒斎一。若一日一夜持二沙弥戒一。若一日一夜持二具足戒一。威儀無レ欠。以二此功徳一。廻向願二求生二極楽一」中の一句を口に出したらも、継母紫の上の死相美に魅せられて尼にしない。その死骸を光源氏と夕霧が、「ほのぼのと、明け行く光も覚束なければ、大殿油近くかゝげてみ」た美しさは、「御ぐしの唯うちやられ給へる程、こちたく清らにて、露ばかり乱れたる気色もなう、つやつやと美しけるる様ぞ限りなき。灯のいと明きに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうちまぎらはすことああし現つの御もてなしよりも、言ふかひなきさまに、行心なくて臥し給へる御有様の、飽かぬところなしと言はんも更なりや、斜だにあらず、類なきをみ奉るに、死に入る魂の、やがて御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなき事なりや。」であった。夕霧ははじめて継母の美貌を直視したが、悲しやそれは能面の如き死相である。かつて見たこともない美しい女体は佛である。永遠に沈黙する精神的晶化の美である。優美と崇高、煩悩と菩提の支合する妙境である。光源氏と夕霧の父子は、死骸を前にして愛の抱擁に応えぬ切なさに苦悶する。次の瞬間には醜く九相に変化する屍体であることを忘れて陶酔する。光源氏の為には、この死相美は現実界の美のはかなさと、涅槃の安けさをしらせた善知識であった。いかなる美と雖も、無常の嵐には一微塵をも留めえないことを教えている。紫の上は死して光源氏に菩提を勧めた。その死相の白光は、光源氏の為の来迎佛に外ならぬ。ダンテの「新生」には、愛する乙女の訃報をきいて、太陽は暗黒になり、星の輝きが現はれ、小鳥共は静まり返った空から落ちて音も立てずに死んで行き、大地が震えるやうに感ぜられる処がある。ベアトリーチェの死後のダンテは、「故郷である浄福な世界は、かりそめの生存の中にはない」といい、自己の宿業を知り、暗さの中に悲嘆する。ルネッサンスの愛は、永遠の女性の愛である。現実の一個の女性を媒介にして、絶対唯一者に会うている。その唯一者は永遠の女性である。キリスト教的フェミニズムである。此のダンテは永遠なる女性、我を天国に導くといった。ダンテに永遠を顕示したのはベアトリーチェである。紫の上は光源氏のベアトリーチェである。紫の上の死を動機として、光源氏は出家する。出家とは、往生、新生青春の回帰、起死回生、求菩提である。日本の人間発見、文芸開華には、いつも仏教が働いてきた。「佛などの掟て給へる身」（御法）という宗教的自覚は、出家に至る迄の長い道程の回顧である。その道程は、「いそぎ」の形相ではなく、随分と道草をくった緩慢なものであった。なぜ緩慢であったか。それは彼が囲繞する美の諸相に心を奪はれていたからであった。己を囲む美が永遠のものではなく、結局は佛界への誘いであることを、自覚しえなかったのであろうが、「佛などの掟へる身」の最後において、紫の上は死相と化って、完全に光源氏の地上的愛執を浄化した。「紫の上の物語」と「妓王の事」は、仏教的フェミニズムである。

妓王達四人は乱世に生きる賤婦であって、清盛から生命を奪はれようとしている。人界に何の楽しみもないから、たゆたひもながめもせず、いそぎ宗教的決断をして尼になっている。強い意志的行動であるが、その動力因は、西方極楽浄土よりの聖衆の来迎を信ずる浪漫的情熱である。源氏物語も哀愁の調が多く流れているが、又華

麗の場面が少くないが、平曲を貫く主流は悲哀である。人間実在自身が宗教的哀愁である。絶望不満の結果が哀愁である。死に至る存在であるといふことが、哀愁の根源である。最高の哀愁は詩の世界において最高の諧調、最高の美である。石津純道教授の調査によれば、平曲においてあはれは、一二八回、悲哀を現はすもの一〇九、悲しは一三二回、その中で悲哀の情を現はすもの一二七である。[18] 四季中最も人間を悲しませる時は秋である。「経国集」には、

秋可レ哀兮、哀二年序三早寒一。天廓落以気蕭目凄清次光微。潦収流潔兮。霜降林稀云々。

とある。中世文芸殊に新古今和歌集に大影響を与えた白氏文集には、

切切暗窓下、嘤々深草裏、秋天思婦心、雨夜愁大耳（朗詠集巻上・蟲）

大底四時心愁苦　就中腸断是秋天（朗詠集巻上・秋興）

とある。平曲でも悲哀を深めるべく多く秋の場合を語る。「妓王が事」には、

かくて春過ぎ夏たけぬ。秋のはつ風吹きぬれば、星　の空を眺めつつ、あまのとわたる梶の葉に、思ふこと書くころなれや。

と謡った。紫の上の死期も亦秋であって、

秋風に　しばしとまらぬ　つゆの世を　たれか草葉の　うへとのみ見む

と歌はれている。推移する自然に無数の美が顕現する。それは進化する生命である。日本人は寔に敏感である。そして宗教的時間を自覚する。それは生（非連続）死（連続）する時間である。これを中世の哲人は、生死は佛のおん命也とも、前念命終・後念即生とも、念々臨終・念々往生といっている。現在時を「永遠の今」と、厳格に考えているのである。これが中世人のいそぎの生活様式となっている。そこで秋は感傷の極みであると共に、法悦の世界であって、「わが命　かなしとききて　よろこべる　人はさながら　佛とぞなる」の境地である。（川端康成・「住吉」所引　伝最澄作）

紫の上の出家の希望を遮ったのは、光源氏の美の愛楽であった。源氏物語で出家した貴族女性は、藤壺・空蟬・朧月夜・女三の宮・源内侍・浮舟である。出家の動機は、源信浄土教から学んだ厭離穢土・欣求浄土観であるが、も一つは男性貴族の専横に対する女性の自由を主張する唯一の賢明な抵抗であったことである。彼女達の出家は必しも熾烈な求菩提心に由るものでない。それは苦悩の穢土と深く観じてはいなかったからである。源氏物語に「地獄」の語のないのもその為である。栄華のできる荘園貴族のこの世は庶民の生活に比べれば、楽土でこそあれ、穢土とは感ぜられない。穢土とは罪悪深重な自我の純粋な内観である。群生の苦悩も自身の責任として忍愛する広大な社会我である。理世撫民性のもののあはれである。源氏物語にはこんな人物はまだ一人も描かれていない。平曲には重盛・文覚がいる。源氏物語の人々は、出家も美的生活の一様式と考えていた。貧や孤独や静寂を愛楽するあはれがあった。茶道や連歌や俳諧等の美の深流である。この適例は宇治の八宮である。僧となっても捨て切れないのみならず、益々熾盛になる欲望的実存のあわれがあった。尼姿の美に誘惑される男性があった。佛教的偽善・堕落である。然しここに仏教的芸能や親鸞の在家仏教の起源があった。

文芸の絶対価値は、平等普遍の人間性を表現する処にある。源氏物語のもののあはれも平家物語の諸行無常も、仏教的世界観による平等観を描写しているのである。源氏物語の世界観であったのは天台浄土教であり、それは人倫のあはれとなっているが、貴族の生活を描くことに力めていて、庶民へのあはれみを描くことが極めて少い。その中で須磨の巻で、須磨を見舞うた親友頭中将と光源氏が、漁夫を引見する処に、

浦に年経るさまなど　はせたまふに、さまざま安げなき身の憂へを申す。そこはかとなくさへづるも、心のゆくへは同じ事、なにか異なると、**あはれ**に見たまふ。御衣どもなどかづけさせたまふを、生けるかひもありと思へり。

とあるのは、愛欲煩悩のあはれではなく、空也の慈悲に通ずる庶民に対する人倫のあはれであり、これが法然や親鸞や一遍によって発展し深められたので、庶民文化も向上したのである。

注①田村円澄　日本浄土教思想史・浄土篇　八六頁
②仏教文学研究②権藤円立　平曲の成立についての考察
③大谷大学研究年報　第十四号　五来重・念仏芸能の成立過程とその諸類型
④中山太郎　日本盲人史　六六頁
⑤仏教文学研究十　清水宥聖・安居院の唱導書について
⑥田村円澄　法然上人伝の研究　八四頁
⑦文学　三四年十二月　福井康順　平家物語の仏教的性格
⑧楽浪書院版　平家物語

王朝文芸の宗教的史観㈣　源氏物語と平家物語の比較

補①大懺法院。慈鎮は平家の怨霊済度を急務とし、元久元年十二月白川坊に大懺法院を建立。建永元年「大懺法院各々起請之事」（門葉記）を定め、その中に、供僧器量之事、説法類、属顕、此外声名法則受師伝音曲堪能階衆聴為其器之輩所撰補也。

補②大原は京都の北、中納言頭基遁世の地として名高く、後には良忍この地に住み、来迎浄蓮華の二院を建てて声明、梵唄の秘曲を伝へ、又融通念仏を勧めた。後には天台座主顕真も、この地に隠棲して道心の生活を送ったといはれ、源空を招請して勝林院に浄土念仏の法門を問答して所謂大原談義、大原問答の縁りの地である。ここには三十年間常行三昧を修した少将聖や、大原三寂として名高い寂念・寂然・寂照の三兄弟が、ここに遁世したことも人口に膾炙している。諸の説話集にはこの地に集団していた聖達の話が多くみられる。

参考　**村田昇著「平家物語の仏教的世界」**（下関東方文化研究所発行）

十一月三十日校了